

祝辭 (代作)

竹田みち

伊豫大洲高等女學校、以今茲乙卯十月當於創立十年、舉行記念祝賀式、以余嚮奉職是校也亦見招、而公事卒々、不得陪其末、乃叙數言以慶之、憶余嚮在是校也、日夕愛其山川之秀麗、而又喜其校風之醇美、今猶有依々於懷者焉、夫大洲之爲地、青山疊翠、清溪飛珠、淙々焉、峨々焉、有入於仙境之思、而此地昔賢中江藤樹釋褐之地、其流風餘韻、亦使人凜然仰止不已、是以其鄉人自醇樸、皆恂々然以爲善爲樂也、夫山川之秀麗既如彼、而昔賢之流風餘韻亦如此、則生於是地、長於是地者、其必有觀感興起、卓然超越焉者矣、群卓然超越者、而教之以無倦之良師、嗚呼、此所以是校十年如一日、隆々然致今日之醇美也歟、抑亦有切望於生徒諸子者焉、而今而後、益涵養其德、砥礪其業、仰以報答良師無倦之隆恩、俯以發揚是校十年如一日之昌運、則庶乎不背山川流簞之勝概、而不損昔賢流芳之遺蹤矣、時方高秋、四山紅葉爛然如錦繡、而諸君與生徒俱日夕在其間、余遙望南天、不勝依依之情也、是爲祝辭、

病院にて

尾上柴舟

床ちかき素焼の鉢の黒々と影ひき今日も夜となりにけり
すべをなみ妻のいたみをうちまもる男の身こそ悲しかりけれ
花瓶のだりあ影さし病院の秋のしいつの黒きゆふぐれ
運搬車音なくめぐる長廊下妻息もなく眠りてありけり
病院の夜の廊下にたちどまりふどこそおもへまた逢はじかど
世にあらで見むとは妻を思はねど人にいはいはれぬ物案じする
すひのみの中の氷にうちくだけしろく更けゆく秋の電燈
あたらしくわれてふものを作り出でむ術をしらねば今日も歎きす
われさへもわれを信せず人の子にわれ信せよと云ふは何事
一心に仰ぎてをれば大空とこゝろ一つにならむとすなり